

探究は、教員が楽しむことから始めよう — 独自カリキュラムの成立に至るまで —

出岡由宇

多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校

1. はじめに

今日、中学・高等学校の教育環境を取り巻く状況の変化が著しい。その多くが、それぞれの学校に根付く教育理念から生じた「内発的」なものではなく、文部科学省の要請や、競合他校との比較や戦略的なものから生じた「外発的」なものである。現場の教員は、その激流に流されるように業務をこなしていく。残念ながら、そこに変化を受け止めるというプロセスはほとんど見受けられない。

教員にとっての基幹業務である授業の在り方は、教員が生徒に知識を授け、その成果をテスト等で数値化して評価をする形式だけではなく、主体的・対話的で深い学びを提供する双方向型授業、いわゆるアクティブ・ラーニング形式への変化が要求されている。これは中央教育審議会から提言された「新しい学習指導要領の考え方」(文部科学省, 2017)の中にも明記され、「これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと」を目的とした学びの転換であるといえる。しかし、この転換も受け止められることはなく、多くの学校でその手法や型だけが先行し、安易なグループワークや、とりあえずの発表形式が散見されているのもまた実情であるといえる。同時に、革新を求める若い教員が積極的にアクティブ・ラーニング型授業を展開し、旧来の型へのこだわりと矜持を持つ経験豊富なベテラン教員との間に大きな溝をもたらしたという事実も見逃せない。

学びや教育は子どもたちのためのものであり、当然大人のエゴによって左右されるべきではない。教育に携わる教員が、真剣にこの変化を受け止める必要がある。しかし、外的要因を受動的に捉えているうちは、それを実現することは難しい。すなわち、生徒に求める資質同様、教員が主体的に行動できるようにならなければならないと考えている。主体性を生み出す要因は何か。生徒に指導をする教員がその核心に触れ、本質的かつ「内発的」な変化を生み出したうえで、成果を子どもたちに還元するべきであろう。

本稿では、こういった理念をもとに、教員集団による「内発的」な変化を生み出し、学びの転換を成立させた多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校(以下、多摩大聖ヶ丘高校)におけるその教育実践の成立までのプロセスと、実践の事例を紹介し、考察する。

2. 教員一丸の形成期

(1) 多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校の紹介

東京都多摩市、多摩丘陵の上に位置する多摩大聖ヶ丘高校は、1988年に学校法人田村

学園・聖ヶ丘高等学校として開校され、翌89年多摩大学開学に伴い、附属中学校を併設し、その附属校として多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校と改称された私立の共学中高一貫校である。全日制の単位制で1学年は4クラス120名、全校生徒合わせて700名前後で、都内の共学中高一貫校としては非常に小規模な共学校である。この点を活かした面倒見の良さ、教員生徒間の距離の近さなどを特色として、どちらかといえば穏やかな子どもや、アットホームな雰囲気を求める保護者から支持を得ている。

しかしながら、中学入学試験の志願者は2011年をピークに減少傾向にあり、それに比例して多摩大聖ヶ丘高校を位置づける偏差値の面でも下降傾向にあった。募集における訴求の中心は、学校の規模や少人数、学校施設といったハード面に依存していた。

こういった事情から、ソフト面としての教育内容の見直しと、新たな教育価値創造の必要性が高まっており、中教審の答申と相まって、アクティブ・ラーニング型の学習プログラム開発が進められていったという背景がある。

(2) 教科主任会の設立

この学習プログラム開発をするにあたりその屋台骨の議論が求められた。多摩大聖ヶ丘高校の主な会議体は、管理職と分掌部長が集まる週に一度の運営委員会、全専任教員が集まる月に一度の職員会議となっている。しかし、これらの会議体、特に職員会議は報告ベースの会であり、他校と同様に議論をする環境ではなかった。先にも記した通り、多摩大聖ヶ丘高校が求める変化は「内発的」なものである。同時に、主体的・対話的で深い学びを実現させるためには、まず教員がこの主体的で対話的な姿勢を獲得する必要がある。つまり、開発段階において互いの腹の内を共有する議論は必要不可欠であった。

そこで2017年度に管理職・教科主任(20～50代)を中心とした会議体、教科主任会が設立され、毎月アクティブ・ラーニング型の学習プログラムに関する議論が1年間続けられた。この会議体のコンセプトは「言いたいことはすべて言う」とし、年齢・キャリア関係なく意見をぶつけられる環境づくりに注力した。

(3) アクティブ・ラーニング型の学習講座の誕生

教科主任会における議論の中で、最も時間を割いたのが「授業を変えられるか」といった問についてであった。研修会を繰り返し、ガイドラインを作成しても、アクティブ・ラーニング型学習の利点や魅力を体感してもらわなければ、本質的・「内発的」な変化には到達しないだろうという意見が多くあったからである。これは前掲した中教審の資料(2017)にもある通り、「こうした工夫や改善の意義について十分に理解されないと、例えば、学習活動を子供の自主性のみに委ね、学習成果につながらない『活動あって学びなし』と批判される授業に陥ったり、特定の教育方法にこだわるあまり、指導の型をなぞるだけで意味のある学びにつながらない授業になってしまったりという恐れも指摘されている」という点を解消することに課題があると感じていたことに起因する。

そこで、多摩大聖ヶ丘高校が着手したのが、サマーセミナーとして開講されていた夏季休暇特別学習講座を、実験的にアクティブ・ラーニング型の学習講座に変えてみようという取り組みである。この講座のコンセプトは、「教員が楽しいと思う学びを提供すること」とした。つまり、教科書や受験中心の指導から離れ、自らの研究領域や趣味に至るまで、上記コンセプトに合うものであれば何でもよいと設定したのである。とはいえ、好きなことを好きなように楽しむのではなく、教員が楽しんで学んでいる内容を教授することは必

須とした。年齢問わず、人間にとって「楽しい」という感情は非常に重要である。特に、幼児期の子どもはあらゆることに興味を示し、それを知ることを楽しんでいる。鈴木・森(2019)による保育分野における先行研究の中でも「子どもたちにとって、絵の具遊びが自分にもできると思える[できる感]のある活動であると捉えている。その結果、絵の具遊びに対する[意欲]、活動へのわくわくするよう[期待感]をもち、『自ら筆をとり、笑顔で絵の具遊びに取り組む』という楽しむ姿が現れた」とあるように、自分にもできるという広い間口と、楽しいという感情に起因する学びへの期待感を高めることは学びの原初であり、中高生にも当然汎用できると考えたのである。それと同時にこの期待感と、学びたいという意欲は密接な関係にあるとも考えた。このアクティブ・ラーニング型の学習講座は、「答えを知った先に新たな問を探す」と「人類の英知を探究する」のダブルミーニングで「A 知探 Q の夏」と名付けられ、高校3年生の大学受験指導講座を持つ教員以外の全専任教員が講座を開講することになった。

3. 「A 知探 Q(英知探究) の夏」

(1) 初年度(2018)の展開

7月中旬から下旬を3期に分け、期ごと4日間連続の1講座を設定。生徒は自分の取りたい講座を選択して任意で受講する方式とした。2期には宿泊を伴う校外学習講座も設定した。また、教壇に立つのは必ずしも教員でなくてもよいことにし、学校外部の専門的な方を招く展開を奨励した。初年度の講座一覧は次に示す通りである(表1)。

初年度の生徒受講率は、中学1年生から高校2年生の全586人の52.6%であった。定員を設けた事情を鑑みれば、まずまずの滑り出しだったといえる。

生徒の学びの深度はもちろんのことだが、それ以上に何よりも重点を置いたのは、「A 知探 Q の夏」前後の教員研修会である。まず、事前研修会では教員を5名1組でグループ化し、それぞれの講座内容と事前に感じている課題や不安を共有し、講座見学をし合うという流れを作った。本番の開講時には、それぞれの教室に多くの先生方が現れ、事前の課

表1 A 知探 Q の夏 初年度講座一覧

1	独創漢字 ～目指せコンテスト入賞～	10	リスーピア見学	19	ブルーベリーの未来
2	歌舞伎を見に行こう	11	図形を極めよう	20	電流回路とホットケーキの 科学
3	言葉トレーニング!	12	数学と折り紙	21	国際貢献 ～誰かの為に役立つことを 考える～
4	落語ってこんなに 楽しいの!?	13	ドラマティック リーディング	22	社会科フィールドワーク ～会津若松で学ぶ～(宿泊)
5	発明王に俺はなる	14	Let's play English songs!	23	写真術の基礎を学ぶ
6	脚本会議	15	アンネの日記から学ぶ	24	ピアノでアンサンブル
7	整数を極めよう	16	VOA News		
8	和算探訪	17	美味しいハンバーグの科学		
9	関数を極めよう	18	奥日光で自然体験(宿泊)		

題の様子を検証するなど、活発な対話が行われた。また、時には参加者として講座を楽しんでいる様子も印象的だった。その後、各自講座の様子をレポート化(図1)し、文章での共有を行った。共通のフォーマットで文章化することで、今回の取り組みに一体感を生み出そうとしたのである。事後研修会では、事前同様のグループにて講座の振り返りと、アクティブ・ラーニング型学習講座への感想、手ごたえや課題などを共有した。

全専任教員が講座を開講し、アクティブ・ラーニング型学習講座を体感した。また相互講座見学から一連の研修会を経ることによって、当然会議は盛り上がった。どのようにすれば良いか、何を解消するべきかといった事柄が、すべて自分ごととなり、多摩大聖ヶ丘高校独自の価値が形成されていく。さらには、日常的に接することの少ない学校外部の方による様々な指導方法に触れ、その刺激を楽しみながら、日常にどのように取り入れていくことができるか、といった発想を生むきっかけともなった。大上段に構えた学術的な知見や、先行研究に依存することなく、今、目の前にいる現状の生徒と職員室内の教員で可能な、かつ最良のアクティブ・ラーニング型学習講座開発に向けた議論が重ねられたのである。

この2018年度以降、「A知探Qの夏」は新型コロナウイルスの蔓延による中断はあったものの、毎年、本校の文化として根付いている。驚くべきこととして、教員が開講する講座が毎年ほぼ刷新されることも付記しておく。

(2)「A知探Qの夏」がもたらした内発的变化の例

「教育」や「成果」という言葉や目に見える点数・偏差値に縛られ、学習指導の枠組みを拡張できていなかった多摩大聖ヶ丘高校は、この「A知探Qの夏」をきっかけに、大きく変わったといえる。2019年度には、学校に新たな価値創造をするための部署として教育企画部が発足し、校内のICT環境の整備や、多くの高大接続企画が生まれた。中でも、本校敷地から徒歩5分の場所に畑を借り、多摩大学ゼミや地域の皆さんと協同して有機野菜を育てる活動は、多くの教員・生徒が年間通して参加し、世代を超えた新たな学びのフィールドとして機能している。また、新型コロナウイルスの脅威と共に過ごした2020年度は、すべての学校行事が中止となったなか、皆で思い出を作りたいという行事委員会と教員の熱い思いが結実し、本校校庭にて「打ち上げ花火大会」が行われた。生徒自ら花火師や警察消防、地域の皆様と交渉し、約50発の打ち上げ花火が夜空を彩った。この会では、普段禁止されている女子生徒のメイクもスマートフォンの持ち込みもすべて容認された。この決定に異を唱える教員は皆無であり、また休日の夜にもかかわらず、ほぼ全専任教員が生徒と共に花火を楽しみ、一緒にレクリエーションを盛り上げた。突拍子のないアイデアではあったが、生徒の望みや意欲を、教員が「無理」と安易に押さえつけず、実現に向けて支援することができた例であり、全国的にも稀有な事例であったといえる。

教員が楽しむこと、また、学校外の社会とつながることなどを中心に、「A知探Qの夏」を通して、生徒と教員全員が共有し続けた価値観は、教員の枠組みの拡張へとつながった。いや、拡張ではなく、元来持ち合わせていた教員の持味を、自由に発露することができるようになったと言ったほうが適切であるといえるだろう。これにより、教員同士の知らなかった一面が見えるなど、より強い相互理解へのきっかけやリスクの萌芽が生まれた。関係が変われば意欲が生まれる、意欲が生み出す新たな教育は期待感をもたらす。多摩大聖ヶ丘高校がこだわった「内発的」な変化は、こういった変遷を経て本校独自の「形」になっていったのである。



写真1 「脚本会議」の様子



写真2 「落語ってこんなに楽しいの」の様子

2021年度まで						
曜日	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

50分×6時限(土曜日は4時限)
放課後は毎日部活動有り



2022年度より						
曜日	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3						
4						
5						
6			探究			
7						

45分×7時限(水・土曜日は4時限)
水曜日の午後は探究学年以外帰宅
放課後は水曜日のみ部活動なし

図2 多摩大聖ヶ丘高校の新時間割

4. 独自カリキュラムとしての探究

(1) カリキュラム化の動き

文部科学省が発表した「高等学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について(2018)」によって、2022年度からの高等学校学習指導要領の改訂が確定した。その中には、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」へと名称変更されることも合わせて発表された。この「総合的な探究の時間」の指導要領には次のような一文がある。「今回の改訂において名称を変更して特質をもたせたことには次のような背景がある。一つは、この時期の生徒が、人間としての在り方を理念的に希求し、それを将来の進路実現や社会の一員としての生き方の中に具現しようと求めていることである。二つは、小中学校の総合的な学習の時間における学びがこれらの特質の具体化を可能としていることである。そして三つは、この時間における学びが社会的に期待されているからである。」

「A 知探Q の夏」を続けてきた多摩大聖ヶ丘高校にとって、この「総合的な探究の時間」が求める学びは、非常に親和性が高いものであるといえる。個人が理念を持つためには、当然描きたい自身の像が必要である。そしてその実現のためには受け身でいるわけにはいかない。同時に、その理念を社会につながるものにするためには、学校という箱の中だけで思考を繰り返していても難しい。「A 知探Q の夏」はこれらをクリアするための環境がすでに整っていたといえる。

そこで、多摩大聖ヶ丘高校では2019年度の冬から、この「A 知探Q の夏」を年間通したカリキュラムに転化するための議論が始まった。

まず行ったのは、探究勉強会である。第1回の勉強会(2019年11月27日)では多摩大学 小西英行教授に來校頂き、高大合同でゼミ学習の在り方やその指導についての研修を行った。多摩大聖ヶ丘高校教員は全員が参加。多摩大学からも5名の教授に参加頂いた。こういった勉強会は校内だけのものも含め、2022年度までに計7回開催された。

この勉強会と同時進行で、探究活動を最大限実現できる時間割の設定についての議論も交わされた。「総合的な探究の時間」の新設だけでなく、主要な教科でも大幅な改修が行われたため、従来の時間割を変える必要性があった。多くの学校が7限・8限の設定を構想していたが、教員・生徒の拘束時間の増加は、多摩大聖ヶ丘高校が重視する期待感と意欲に結び付くとは考えづらい。そこで、本校は極力負担を減らしつつ、探究学習が最大限実現できる時間割を設定した(図2)。

上記時間割の実現によって、水曜日の午後は探究を行う生徒のために全教員が力を割ける環境が整った。つまり、生徒の意欲を下支えするサポートが、学校全体でできるということになる。さらに生徒が活動を行う際、時間を気にせず学校外に出て活動することもできるようにした。社会に接する機会を増やすためには、課外活動は必須であり、そのための配慮でもあった。

こういった抜本的なスタイルの変化は、多くの学校においては軋轢のもととなり、実現は難しいと思われる。しかし、多摩大聖ヶ丘高校では前向きで丁寧な議論の文化が既に成立していたため、実現することができた。

(2) 多摩市役所との連携と地域探究

勉強会による教員の理解と、時間割というハード面の整備は進んだ。あとはその中身、ソフト面の整備である。2.(1)で前述した通り、少人数でアットホーム、かつ穏やかな生徒が多いという点が本校の特徴だ。そんな学校がどのように社会との接点を持ち、その期待に応えることができるか。導き出したのは、「地域連携探究」であった。もちろんSDGsや理数・プログラミングという材料も世の中にはあったが、まずは足元、身の丈にあったことを学び、お世話になっている多摩市へ還元しようという考えを優先させたのである。

それをもとに2020年度以降、多摩市役所をはじめ、多摩市を地盤に活動する様々な団体との協働を開始した。若い住人の力を求めている多摩市のニーズとも合致し、良好な協力体制が整った。また、こういった渉外や学校外の方との協働も、「A知探Qの夏」のノウハウが活かされており、すべての教員が抵抗なく受け入れることができた。

(3) 探究初年度の取り組み

独自の時間割と多摩市役所との地域連携を基盤に、2022年度から「探究基礎」を週2コマの正規授業として開始した。対象は高校1年生である。「探究基礎」の目的は、生徒に「自分以外のことを考える思考」と「感謝と称賛から得られる自信」を身につけてもらうこととし、そのために必要なステップをすべて独自のテキスト化して作成した。民間業者による教科書が多くの学校で用いられているが、本校の特徴、本校生徒の特性に合わせた探究を実現するためには、この独自テキストは必須であった。1学期9回の授業をテキストによる座学とワークで進め、2学期は多摩市の課題解決フィールドワークと発表に充てた。上記正課の授業とは別に、多摩市役所との協働も進めており、様々な課外活動を展開した。

特筆すべき活動として、2学期の探究期末考査を挙げる。フィールドワークを中心にを行った2学期の試験は2部構成の「ポスターセッションテスト」とし、1部は校内で専任教



写真3 街なかプレゼンテーション
テストの様子①



写真4 街なかプレゼンテーション
テストの様子②

員全員を試験官とし、生徒による発表試験・評価を行った。2部では、多摩センター駅前のパルテノン大通りにて、「街なかプレゼンテーション期末試験」なるものを行った。多摩市の課題を考え発表するのであれば、その評価は市民の方にしていただくという考えのもと、多摩市役所全面協力で行われたこの奇抜な試験は、2時間で約400名が訪れる素晴らしいものとなった。このような形式のテストは全国でもほぼ事例がないが、本校探究基礎の目的との符合を鑑みたとき、非常に教育的効果が高いものであったといえる。

5. おわりに

本稿では2017年に端を発した、多摩大聖ヶ丘高校の学びの転換を時系列に沿って紹介した。「内発的」な変化にこだわり、個人ではなく教員集団として全員でステップを上げるため、絶え間ない議論を続け、意欲に裏付けされた理念を共有してきた。何はともあれこの学びの入り口は、「楽しい」という感情であった。「A知探Qの夏」によって、教員が「勉強」や「学力」という言葉の鎖から解放され、あらゆる事柄の中に「学び」はあると思い直せたことが、その後の幅広い教育展開の実現へと続いていった。しかし、それが子どもたちにとって最良であると思い込んでいけない。個別最適化が求められる今の教育現場の中で、より良い形を模索し続ける必要があるだろう。多摩大聖ヶ丘高校は、今後もあくまで教員集団全員でこの課題に対しても向き合っていくつもりである。

謝辞

これらの取り組みは、2017年度の多摩大学との高大接続アクティブ・ラーニング研究会をきっかけに多摩大聖ヶ丘高校内でも広がりを見せたものである。機会をくださった多摩大学の教授の皆様をはじめ、本校の変化に賛同し多大なご協力を賜った多摩市役所職員の皆様、地域企業の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 文部科学省 (2017)『新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—』
- 鈴木裕子・森 佑季 (2019)『子どもの「楽しむ」を保育者はどのように評価しているか』p. 48.
- 文部科学省 (2018)『高等学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について』